

教育世論の構成とテレビメディア

—教員報道/少年報道から見えてくるもの—

○酒井真由子（上田女子短期大学）

○越智康詞（信州大学）

1. 問題の所在

1990年代以降、我が国の教育社会学は、社会史研究や構築主義の隆盛もあって、教育言説の分析を広く展開し、多くの研究成果を蓄積してきた。しかし、その多くは、新聞、雑誌、書籍といった文字メディアを素材としたものであり、現在我々が日常的に接触する主たるメディアであるテレビ、Webといった音声/映像系・文字/映像系メディアを対象とする研究については、ほとんど手つかずになっている。しかし、生きて作用する世論(力)を理解するには、文字メディア以上に即時的であり、圧倒的に日常化しているテレビという映像メディアの影響を無視することはできない。本報告では、教育世論は教育世界に関する全体的な印象・情動であり、社会・政治への要求であるという理解に立って、教育世論構成のメカニズムについて、テレビのメディア特性についての理論的検討及び若干の報道事例の分析を通して考察する。

2. なぜメディア/世論構成に注目するのか

現在、メディアは変動期にあるものの、マスメディアの影響は依然として巨大である。他方、教育は、それ自体が高度に言説的・イメージ的・情動的に構成され、テレビメディアとの共鳴度が高い領域であるにもかかわらず、両者の関連は深く問われないまま放置されてきた。さらに「政治」「行政」「公衆」の三者で構成された政治システムのハイパーキカルな構造が弱まることで流動化しつつある現在、「政治」と「公衆」を媒介する世論の重要性が高まり、教育も世論の影響を強く受けるようになってきている。今や世論とメディアの関係を究明することは、民主主義の質を問う上で、避けて通ることはできない課題である。

3. メディア分析の基本視角

では、メディア分析の特徴はどこにあるのか。現象を無心に観察するという方法では、なかなかメディアの効果を観察することにはならない。私

たちは通常、メディア（眼鏡などの道具）を使って何かを観察（行為）する際、対象（行為の帰結）に心を奪われ、メディアそれ自体を意識することはないからだ。そこである種の理論的バイアス（補助線）がメディアの観察には必要になる。

本報告では、「メディアはメッセージである」というマクルーハンのテーゼをさしあたっての出発点に据えるが、そこには、メディアは五感・身体の拡張であり、それを通してリアリティ（環世界）を構成する媒体であり、たとえそれが観察・伝達・表現を行うものに過ぎない場合でも、それ自体が世界への介入・行為・作動である、といった意味が含まれる。

本報告で扱うメディアはテレビである。このメディアは情報を伝達し、世界・現実を映し出す（透明な）媒体（であるべきだ）とされるが、このような想定自体が、このメディアによって仕掛けられた罠であるといつてよい。

以上を踏まえた上で、各メディア特有のメディアバイアスやメディア特有の形式が生み出す物質的効果について詳細に観察することが必要だ。ただし、ここでバイアスの外部に「真の真実」を想定しているわけでも、バイアスそれ自体を否定したいわけでもない。バイアスは生成する力・つなぐ力でもあり、バイアスの功罪は、文脈の中で判定されるべきものである。とはいえ、私たちは、バイアスが生じる仕方—ここでは情報が選択される際に働く力や情報の流れを制御する仕組みなどを観察し、それぞれの文脈の中でそれが持つ意味や効果を考察することはできる。

たとえば、テレビや新聞、ネットなどの通信メディアにおいて情報の選択や編集は重要ポイントであるが、情報選択等に影響を与える内部的傾向性としてすぐ思い浮かぶのは、〈見てもらうための工夫が必要〉という条件である。ある程度能動的読者を想定できる新聞と比べ、時間毎の視聴率

が重要になるテレビでは、視聴者の受動的な構えにより適応し、退屈させない、知性に負担をかけすぎないといった要請が、報道の内容や形式へのバイアスをかける。

<電子メディアとしてのバイアス>

世論形成にとってのテレビメディアの重要性を理解するには、それが人間のどの感覚を拡張・再編するメディアであるかに注目する必要がある。

マクルーハン (1964/1967) によれば、テレビなどの電子メディアは、諸感覚を分離し分析的であることを特徴とする視覚メディアでも、精細度の高い情報を提供するホットなメディアでもなく、諸感覚を包摂し圧縮されたイメージを提供するクールなメディアで、視聴者へ情報を伝えるよりも、状況に巻き込むものである。

テレビは単に「わかりやすさ」を狙って善/悪の二元論を提示するのではない。「善」は無謬で弱い存在、「悪」は憎く・ふてぶてしい存在として描かれ、そこにドラマが立ち現れる。悔しさ、無念さ（歎び、感動）などの情動を伴う衝撃的な現在に、多くの「〇〇人」が立ち会っているとのライブ感覚が共有されることで、感情の共同体が構築される。意見の一致や合意が問題なのではない。（切迫した）状況に置かれていることの共通理解が、道徳的で情動的な「空気」を醸成する。

テレビはまた、自らの身を隠しながら（安全圏から）世界を傍観・観察する「のぞき見」的な衝動に駆動されたメディアでもある。こうしたテレビメディアの構造は、この社会を「傍観的観衆」とその「ターゲット」からなる二層へと構造化する。大衆とは、まさにこのようにして構成された社会や政治の観察者・傍観者であり、いつでもそこにはターゲットを求める準備がなされている。

役者（強者と弱者）が揃い、誰もが情動的にコミットしやすい教育の領域は、まさにこうしたテレビメディアに共鳴する素材に満ちている。

言説分析の視点・方法では、こうした世論の生きた力を理解することはできない。後述するマルチモダリティ分析は、こうした複雑さを記述する方法である。

<マスメディアとしてのバイアス>

テレビと教育世論の深いつながりを理解するには、このメディアが情報を選択し伝えるだけでな

く、「伝達する」という事実/行為を通して、当該情報を公式認定し、後続するコミュニケーションの共通前提を創出する「力」を保持したマスメディアであることも考慮に入れる必要がある。

とはいえここで、マスメディアの権力性を強調するだけでは不十分だ。ここで言うマスメディアは、「送り手」と「受け手」が直接にインタラクションしないことを条件として形成されるシステムである（ルーマン 1996/2005）。マスメディアにおけるリアリティ構成には、コミュニケーションプロセス全体がかかわっており、「送り手」だけでなく「受け手」も重要な役割を担う。

なるほど、情報を垂直に流すトップダウンの報道において「受け手」の存在は、ほぼ無力である。しかし、無力と無意味は違う。実はこのプロセスの中で視聴者は「教え導かれるべき存在」として構成され、このような想定がプロセス全体を支えている。とはいえこの場合、自己準拠的な情報選択（コミュニケーション接続への気遣い≒視聴率）より、他者準拠的な情報選択（他の基準から見た情報の重要性）が優先されるのは事実だろう。

これに対し、消費時代におけるテレビの自己肯定を経て、情報のフラット化や市場競争の激化を背景に、テレビが危機的状況を迎えつつある今日、テレビはますます自己準拠的なバイアスのもとで、その情報選択を行う傾向を強めている。

その結果何が生じるのか。そもそもテレビ（局）にとって視聴者はおお客様であり、その欲望を満足させることが務めである。電子メディアは思考より全感覚に働きかけるものであるが、ここにサービスへの傾倒が加わることで、マーケティング的手法を駆使し視聴者の欲望や幻想に無批判に迎合するなど、自己準拠への短絡が生じる。

こうしたサービス精神に溢れたテレビが、視聴者の生活の不安や政治的要求を代弁することで、社会や政治への要求が過剰に産出されるようになる。テレビの「お客様」である視聴者は、行政サービスの「お客様」、そして「要求する市民/私民」として構成され、世論の強度もアップする。

本報告では、以上のような特性を持つテレビメディアが、教育世界をいかに描きだし、教育世論を構成していくのか、事例を通して考察する。

（越智康詞）

4. テレビメディア分析の方法と事例の概要

次に、研究方法（データベース化の方法）とデータの分類・分析の仕方、質的な内容分析の方法、対象とした事例の概要について述べる。

4-1 報道内容のデータベース化の方法

テレビメディアによる報道内容のデータベース化は、以下のような方法で行っている。

- (1)作業地：関東と関西の2地域
- (2)作業者：4名（関東2名、関西2名）
- (3)作業期間：2013年7月～現在に至る
- (4)対象局：地上デジタル放送局（9局）
- (5)関東：NHKと民放キー局系4局（TBS、テレビ朝日、日本テレビ、フジテレビ）、
関西：民放キー局系4局（毎日、朝日、読売、関西）
- (6)対象番組：各放送局の定時のニュース、ワイドショー、報道番組（不定期の特集／ドキュメンタリー除く）

4-2 分野別分類の方法

現在、テレビはどのような教育関連情報を、どの程度取り上げているのか。本報告では、2014年4月と2014年12月のNHK、日本テレビ、フジテレビをサンプルとし、対象とした放送局の1ヵ月分のインデックス及びデータベースから、その月の教育関連の報道内容と、それぞれの内容分野ごとの報道数を集計した。内容項目の分類については、小林（2008）の分析コード表に依拠し、教育関連の「政策」「選挙」「少年犯罪」「事件・事故」「イベント」「社会現象」「裁判」「学校教育」「スポーツ」「その他社会」として設定した。図表1がその集計結果である。以上の結果から、政策に関する報道についてはNHKに多く民放に少ない、少年犯罪、事件・事故などセンセーショナルな報道については、視聴率がより経営に直結しやすい民放に多く見られるなどの傾向を伺うことができる。

図表1 教育関連の報道内容の分野別分類

		政策		少年犯罪	事件・事故	イベント	社会現象	裁判	学校教育	スポーツ	その他社会	計
			選挙									
2014年4月	NHK	14	0	11	15	9	1	3	24	2	48	127
	日テレ	6	0	24	69	17	7	8	10	9	45	195
	フジ	5	0	18	51	10	4	7	9	3	30	137
2014年12月	NHK	6	5	4	5	1	1	0	6	0	24	47
	日テレ	1	0	14	31	6	4	6	6	1	27	96
	フジ	3	3	11	27	1	4	8	3	1	23	81

4-3 質的な内容分析の方法

伊藤（2006）によれば、文字や音声言語といった言語だけでなく、物、色、形、配置といった言語以外のものすべてが、社会的な意味作用を作り出す媒体である。語りや映像などがセットになって作り上げられているテレビメディア分析においても、言語以外のものを無視することはできない。テレビメディアは、言語と言語以外のものの組み合わせによって、語られる内容を規定していくからである。

そこで本報告では、「ニュース・テキストを構成する諸記号の、言語的、映像的、音響的な様態」（伊藤 2006）を記述する方法であるマルチモダリティ分析の手法を援用し、対象とした教員報道と少年報道で映し出されている言語、映像、音響を記述していくことを試みる。アナウンサーやキャスターなどの語り、インタビューを受けている人

の年齢や肩書き、テロップの配置や大きさ、効果音、挿入映像に映し出されているものなどが記述の対象となる。

分析するにあたり、「カット」と呼ばれる被写体が存在する空間の時間的・写像的に断絶のない映像を最小単位とした（吉田 2008）。まず、対象とした教員報道や少年報道をカットごとに「カットの概要」「誰が（もの場合もある）」「どこで」「何をしているか」「取材方式（資料映像、街頭インタビューなど）」を記録し、カット別データを作成した（図表2）。カット別データを作成することで、頻出度の高い人やものなど映像の特徴、報道の形式や流れを把握することができる。

さらに、対象とした報道の特徴的な部分（連続的なカット）を抜き出し、誰が何を語っているかといった「語り」、テレビ画面には何がどのように映し出されているかといった「ヴィジュアル構

成」、何がどのように記述・表示されているかといった「テロップ」を記述していった(図表3)。そうすることで、複雑なテレビメディアの報道内容の物質的効果の記述が可能となり、<見てもら

うための工夫>や、視聴者をドラマの世界へと巻き込んでいくプロセスを明らかにすることができる。

図表2 カット別データ(「高1担任教師が入学式欠席賛否」2014年4月14日フジテレビ『とくダネ!』(8:00~9:50))

番号	カットの概要	誰が	どこで	何を	取材方式
1	スタジオ、菊川、小倉、梅津	菊川	スタジオ	—	
2	誰もいない教室	***黒板、教卓、机、椅子	教室	—	資料映像
3	校舎と桜(学校)	***校舎、桜	学校	—	資料映像
4	入学式(新生の名前を呼ぶ)	***入学式の様子、生徒と校長	体育館	—	資料映像

図表3 特徴的なカットの記述(「高1担任教師が入学式欠席賛否」2014年4月14日フジテレビ『とくダネ!』(8:00~9:50))

画面右上のテロップ: 息子の高校入学式優先で波紋/高1担任教師が入学式欠席/賛否両論			
番号	語り	ビジュアル構成	テロップ
1	MC(菊川): 担任の先生が入学式の日になかったらどう思いますか?	(スタジオ)MC3人。カメラ目線。	家庭優先し入学式欠席で賛否
2	ナレーション: 一人の教師のとった行動がいま波紋を広げている。	(教室内)黒板、教卓、机、椅子。斜めから撮る(左下が下がり、右上が上がる)。	高1担任教師が入学式欠席賛否(右上)/波紋(右下に大きく)
3、4	ナレーション: 埼玉県内の県立高校でこの春、一年生の担任となった50歳代の教師が、入学式を欠席した。その理由は	(学校)校舎と桜。体育館での入学式の様子。生徒と校長。	1年生の担任教師が入学式を欠席(欠席の文字大きく)

4-4 対象とした事例の概要

本報告では、教員報道と少年事件報道の二つを事例として取り上げ、質的分析を試みる。

教員報道で取り上げるのは、2014年4月14日(月)のフジテレビ『とくダネ!』(8:00~9:50)で報道された「高1担任教師が入学式を欠席」である。これは、ある高校の1年生の担任教師が、自分の高校1年生の息子の入学式に参列するため、職場の入学式を欠席したという内容の報道である。この高校教師は何か法に触れる行為を行ったわけではないが、テレビメディアにおいて報道されるべき対象として選択され、不祥事として扱われたケースである。

少年報道については、2015年2月20日(金)から3月上旬にかけて各局で盛んに報道された「川崎市中1男子生徒殺害事件」を事例として取り上げる。川崎市に住む中学1年生の男子生徒が、知り合いの少年たちによって多摩川の河川敷で殺害された事件である。

当日の発表では、この二つの報道の特徴的なカットごとの記述(映像やコメンテーターの発言等)をもとに、テレビ=視聴者が無責任な見物人へと生成すると同時に、学校や教師が愚かな見世物として構成されていく様子や、いかにしてテレビが、事件や出来事の実事報道という名目の下、この出来事をドラマ化し、私たちを感情の共同体へと巻き込んでいくのか、そのメカニズムやプロセスについて示していく。(酒井真由子)

【付記】本報告は、科学研究費助成金「テレビメディアにおける言説・映像空間の特性と教育世論の形成に関する実証的研究」(課題番号 25245075、研究代表者:越智康詞)においてデータベース化をすすめているテレビメディアによる教育言説データの一部を使用する。なお、本研究で作成したデータは教育研究以外では使用しないことをデータ取り扱いルールとしている。

*参考・引用文献及び分析データの詳細は当日配付資料を参照。